

派遣者番号	R2K08	氏名	加藤 祐輔
研究主題 —副主題—	後輩教師と共に高める「授業デザイン力」に関する研究		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	伊藤 良子 増田 謙太郎
所属	千代田区立九段小学校	所属長	清水 明

キーワード：後輩教師 授業デザイン 映像によるリフレクション研究

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

本研究は、後輩教師とともによりよい授業について考え、「授業デザイン力」を高め、最終的な目標として、後輩教師が自分の力で、よい授業をデザインしていけるようにしていくことを目的としている。

対象となる後輩教師は、教師歴が1年目～4年目までの者とする。あえて後輩教師という言葉を用いているのは、非常勤講師、産休育休代替教員として勤務してきた者が、初任者として勤務校することもあるためである。

大村はま(1973)は、著書の中で「いくら年が若くて、子どもをかわいい、というまなざしで見たり、かわいいという言葉をかけたり、一緒に遊んだりしたとしても、そんなことは、たわいもないことだと思います。一緒に遊んでやれば、子どもと同じ世界にいられるなどと考えるのは、あまりに安易すぎませんか。そうではないのです。もっともっと大事なことは、研究をしていて、勉強の苦しみと喜びをひしひしと、日に日に感じていること、そして伸びたい希望が胸にあふれていることです。私は、これこそ教師の資格だと思います。」と述べている。

私自身、毎年のように課題を見付けて、苦しみと喜びを味わいながら、教師生活を送ってきた。また、ここ数年で後輩教師を指導することが増えた。それぞれよい授業をしようと、思い悩みながらも努力している姿を見てきた。そんな自分自身や後輩教師の姿から、どんな時代でも教師が「伸びたい希望」を胸に、児童が楽しく力を付けることができるような授業を創っていくことは普遍的な課題であると考えます。

また、OECD「Future of Education and Skills 2030 プロジェクト」は、2030年の教育に求められている未来像を描いた「OECDラーニング・コンパス」(図1)を提示している。



図1 OECDラーニング・コンパス2030

児童一人一人が学びの羅針盤を持ち、自分で課題を解決していけるような授業を設計できる、「授業デザイン力」を教師が身に付けていくことが必要であると考えます。

勤務校の後輩教師の授業を参観すると、個々に工夫をし、努力していることが分かる。しかし、特に気になった点が二点ある。第一に、その1時間が単元全体の中でどう位置付けられているのかを教師自身が把握しているかということ、そして第二に、児童自身何ができるようになっていけばよいのかを明確に打ち出しているかということである。

「主体的・対話的で深い学び」について、「小(中)学校学習指導要領解説総則編」では、以下のように述べられている。

- ・単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、そのまとめ方や重点の置き方に適切な工夫を加え、(中略) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導ができるようにすること
- ・単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと

このことから、澤井(2020)は、「どの教科であっても、教師は、1単位時間ごとに細切れで考えるのではなく、単元などの長いスパンで児童の力の育成を目指していくことが求められています。」と単元全体で授業をデザインすることの大切さについて指摘している。

そして、文部科学省の通知(2019年3月)「主体的に学習に取り組む態度」、中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」2019年1月)では、次のような説明がある。

- ・知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面
- ・粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

この二つの側面で評価することが求められる。

これらは児童自身の「内発的」な動機付けを重視したものであり、教師が意識して、授業改善を図ら

なければならないと感じている。

以上を意識して、授業をつくっていくことができれば、後輩教師の指導力が向上するのではないかと考える。自分の経験や知識の伝授ではなく、後輩教師一人一人が課題に気付き、それぞれ目標を立てることができるように支援することを大切にしたい。先々まで学び続ける、持続可能な学びをもった教師として、活躍できるように研究をする。

2 研究の方法

(1) 後輩教師へのインタビューによる、課題の把握

後輩教師たちに今年度、意識して取り組んでいることは何かを聞いてみると、「児童にねらいを考えさせる。また、児童自体が主体的になれるように意識した授業をつくる。」「学習の規律を作りながらも、児童に自由に考えさせる授業をつくる。」等の回答があった。

(2) 多様な授業デザインの提示

後輩の自己課題に合った授業デザインを筆者自身が設計し、提案型授業を行う。多くの学校においてOJT指導で行われているような形とは違い、筆者自身が授業デザインをするといった形で行う。そのねらいは二つある。

ア 課題に即した授業イメージを後輩教師に明確にもたせること

イ 先輩教師があえて授業をし、「指導について、できなかった」ことを語ることで、後輩教師との協働的な学びにつなげること

アのねらいについては、後輩教師から聞き取った課題から、授業の具体的な型を先輩教師が提案することで、授業デザインをするイメージを後輩教師が明確にもてると考える。

イのねらいについては、浅井ら(2019)による「小学校の改革における教師のコミュニティの形成—『できない』という教師の語りに着目して—」における記述を基に設定をした。省察の際に提案授業をした筆者自身が、授業の中で、感じた不満足感をあえて語ることで、教師としてできて当然、という考えを捨て、後輩教師とフラットな立場で協働的に学べると考えた。

(3) 省察・検証

授業を行った後、撮った映像を一緒に見ながら省察を行う。

- ・省察の視点・学習のゴールを意識した単元設計で授業ができたか。
- ・児童の伴走をしながら、励ましていたか。
- ・自己課題の解決に効果的な授業デザインになっていたか。

省察の視点を三点決め、ルーブリック化したワークシートで三段階評価をしながら行っていく。

後輩教師には、提案授業を見る前に前単元で行った自身の授業に対する自己評価を行ってもらふこととする。

3 研究の結果

2名の後輩教師に対して、提案授業、省察を行った。授業省察表の数値の上がり方は共通していた。授業省察表の視点を三点に絞ったことで、提案授業後の省察時に筆者自身も解説がしやすく、後輩教師も見ると視点が明確になった。意図的に筆者の指導における経験を話合いの素材にしたことで、後輩教師が緊張することなく、「授業デザイン」について考えることができた。先輩教師である筆者自身が「できなかった」事実を語ることで、後輩教師が授業における困難を共有することが可能になったと考えられる。

4 研究の考察

本研究は、F・コルトハーヘン(2010)が指導者のスキルとして教育実習生の基本的スキルを把握することであると指摘していることを参考にし、まず後輩教師がどの局面にいるかを把握した。その上で、後輩教師一人一人の課題にあった授業モデルを提示することは、授業をデザインしていく道筋を示すことができ、効果的だった。

先輩教師が「指導についてできなかった」ことを語ることで、後輩教師が同じ立場で語るができると感じた。これは多くの学校現場で見られる、一方的な後輩への指導に陥りがちなOJTの改善に繋がると考える。今回コロナ禍ということもあり、提案授業後の後輩教師の授業に対する省察を行えなかった。そのため、事前事後の比較検討が出来なかったことが課題として残った。

5 今後の展望

後輩教師の授業デザイン力向上のために、今後も今回のような取組を継続して行っていく。